



楊偉 教授/杨伟 教授

四川外国語大学日本学研究所 所長/四川外国语大学日本学研究所 所长

日 時 : 2022 年 3 月 28 日

場 所 : 四川外国語大学 (オンライン)

使用言語 : 日本語

聞き手 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

時 間 : 2022 年 3 月 28 日

地 点 : 四川外国语大学 (线上采访)

使用语言 : 日文

采访者 : 野口裕子

(北京日本文化中心 (日本国际交流基金会))

【目次】

1. 日本語との出会いから今まで
- (1) 日本語との出会いと武漢大学の思い出
- (2) 恩師黄瀛先生との出会いとその後の研究
- (3) 博士課程とその収穫
2. 日本の研究者との交流の思い出
3. 西南地域の日本研究について
- (1) 1980 年代の西南地域の日本研究の状況
- (2) 近年の動向
4. 日本研究の今後について

【目录】

1. 结缘日语至今
- (1) 结缘日语, 回忆武汉大学
- (2) 遇见恩师黄瀛后的研究
- (3) 博士课程及其收获
2. 回忆与日本的研究者的交流
3. 关于西南地区的日本研究
- (1) 1980 年代西南地区的日本研究状况
- (2) 近年来的动向
4. 关于今后的日本研究

【本文】

日本語との出会いから今まで/结缘日语至今

(1) 日本語との出会いと武漢大学の思い出/结缘日语, 回忆武汉大学

たぶん他の研究者と違って、偶然というのか定めというのか分からないですけども、私は実は高校時代はロシア語が専攻だったんです。外国語を専門的に勉強すれば、もしかして何か仕事を見つけることができるかもしれないと言われて、重慶外国語学校（注：中学校、高校に相当）に入ったんですね。その時は、高校を卒業した後、田舎の方で再教育を受けなければならない、そういう時代でしたけれども、ちょうど（私が大学に入る）1978 年に中国では全国統一試験が始まって、成績さえよければ誰でも全国の統一試験を受けることができ、受かれば田舎に行かずに直接大学に入れることになりました。だから私は高校も卒業せずに、高校 1 年の時に統一試験を受けて、大学に入れたんですけども、その時私はまだ 15 歳、つまりまだ何もわからなかったんですね。ロシア語を続けて勉強するのか、あるいは他の外国語を専攻したほうがいいのかずいぶん迷ったんですけども、その時はロシアと関係がすごく悪化していたので、高校の先生に、「ロシア語を勉強してもあまり意味がないかもしれない、それだったら日本語にすればいいんじゃないか」と言われて、武漢大学の日本語学科に入ったんです。

（武漢大学には）非常に特別な日本人の先生がおられました。どういう訳か分からないですけども、中国がすごく好きでずっと武漢におられた方で、高先生とみんな呼んでいました。中国に長く住み着いて中国っぽい名前を付けられたのかもしれませんが。

それから、たぶん3年生の時、だいたい1980年になると、中国と日本の交流がちょっと開けてきたので、静岡県から一人の高校の国語の先生が派遣されてきました。あの先生はすべて日本式に教えてくださって、何でも日本人はこういう風にするとか、ここは違いますと、いろいろちゃんと叱ってくれました。ここはだめとかあれはだめとか、すごく厳しい先生ですけども、いろいろ勉強になったということを今でも覚えています。

(2) 恩師黄瀛先生との出会いとその後の研究/遇見恩師黃瀛后的研究

その時はまだ言語の勉強が主だったので、文学はあまりろくには勉強しなかったんですけども、そろそろ学部生として卒業をしようとした時に、ちょうど四川外大が大学院生を募集していたんですね。四川外大には、黄瀛という、1920年代、1930年代に日本の詩壇でも大活躍していた日中混血児、つまりハーフの詩人の非常に有名な教授がおりまして、教鞭をとっていました。それで、その有名な先生に教わりたと思って応募し、合格して、四川外大に入って、重慶に戻ってきたんです。

黄瀛先生は詩人ですので、日本の文壇の話をしてくださいました。例えば草野心平との交友とか、わざわざ花巻に行って宮沢賢治に会いに行ったりしたとか、そういう話をしてくれました。その時、四川外国語大学には、黄瀛先生の弟子の王敏先生（注：現・法政大学国際日本学研究所教授）がおられて、日本の児童文学の研究をしておりました。王敏先生は中国で最初に宮沢賢治を中国の読者に紹介した人ですね。先輩としてすごく尊敬していましたし、仲も良くて、王敏先生にいろいろお世話になる中で、日本の児童文学の翻訳もさせてもらいました。たとえば安房直子や乾富子の童話とか、いろいろ翻訳しました。そういう翻訳を通して、日本文学は面白いなと思って、だんだん近代文学の方に深く入っていったんですね。

その時、私は太宰治がすごく好きでしたが、その時の主流のイデオロギーとは結構ずれがあって、そういう無頼派とか、ああいう文学をやって大丈夫かなと言われたんですけども、黄瀛先生は「それでいいじゃないですか、自由にやりなさい」と言われてですね、だから私の修士の論文のテーマは太宰治の思想発展史についてでした。卒業論文が完成して黄瀛先生に読んでもらった時に、黄瀛先生の笑顔ですか、私は今でも覚えています。ああいう笑顔だったら卒論はたぶん大丈夫だ、と思って、刺激を受けて、もっともって日本文学を研究する気になったんです。

修士を卒業するとそのまま四川外大に残って、日本語学部の教師として学生に日本語を教えるようになりました。たぶん北京とか上海の日本研究者は、日本に国費留学するチャンスが結構多かったんじゃないかなと思いますが、四川外国語大学は四川省の省立の大学だったので、教育部からの国費のチャンスにはなかなか恵まれなかったんですね。私は勉強する意欲が強かったので、国費じゃなくても黄瀛先生の推薦状で法政大学に留学に行って、1992年から2年間、法政大学の大学院で研究生として日本の近現代文学を勉強しました。その時の先生は、その時の法政大学の文学部の学部長、堀江拓充、ペンネームは立石伯、という先生でした。でも1年が終わって、その先生は勉強のためにフランスに行かれてしまったので、私は日本の評論家の勝又浩先生の門下に回されました。でも勝又先生は私の日本研究にはいろいろ影響を与えてくださった方で、日本文学の研究手法とか問題意識についていろいろ教えていただきました。今考えてみると、今の私の研究テーマはその時にもう決まっていたんじゃないかなと思います。

今までいろいろ日本文学を研究してきたんですけども、一つのテーマとしては『銅鑼』同人です。1920

年代、草野心平は広州にある今の中山大学、その時は嶺南大学の留学生だったんですね。彼は嶺南大学の中国人と一緒に『銅鑼』という同人誌を作りました。その時、黄瀛先生は日本の有名な『詩聖』という詩誌に投稿して、草野心平とだいたい隣の位置に詩を載せてもらいました。それで草野心平は黄瀛先生に、「あなたは日本人なのか、中国人なのか」というお尋ねの手紙をよこしてきたんですね。そして『銅鑼』の同人になってくれませんか、ということで、黄瀛先生も『銅鑼』の同人になったわけですね。だいたい『銅鑼』の3号から宮沢賢治も入ってきて、いつも名を連ねて詩を発表したんです。だから私は黄瀛先生の中日文化交流史にも残るそういうエピソードとか歴史にすごく興味を持って、いつかそういう歴史を研究しなければならないと思って、ずっとそのチャンスを待ってたんです。

（日本での留学は）私費だったので、バイトをする傍ら勉強するので大変しかったです。また、大学の仕事もありますから、2年間勉強して、一旦、四川外大に戻って、続けて先生の仕事をやりました。

2006年に在重慶日本国総領事館ができて、国際交流基金から高橋耕一郎さんという方が出向してこられました。うちの大学もしょっちゅう総領事館と交流があって、高橋さんとも友達になりました。そういう（団体。注：国際交流基金のこと）があることは全然知らなかったの、いろいろ挑戦してみようと思ってですね、国際交流基金の援助で、だいたい2008年から2016年まで毎年のように四川外大に西南地域の日本研究者を集めてシンポジウムを開催しました。

私は黄瀛先生に関するシンポジウムもできればいいなと思ったんですけども、2006年にちょうど、日本のODAのおかげで、私は別のプロジェクトで再び法政大学に行き、当時、国際日本学研究所に移っておられた王敏先生のところで共同研究員として1年間研究をしました。日本文化論についての研究で、『日本文化論』¹という本を書かないといけなから、『銅鑼』同人についての研究テーマはちょっと後回しにしたんですね。1年後に重慶に戻って高橋さんに会ったら、「黄瀛先生の研究はどうなってるんですか」と言ってくれました。ちょうど王敏先生も黄瀛先生の弟子なので、「じゃあ、一緒にやろうよ」ということで、シンポジウムの企画をしました。プロジェクトを申請して、国際交流基金に採択してもらってよかったですね。いろいろ経費を出してもらって、四川外国語大学で初めての大型の国際シンポを開催できたことを今でも国際交流基金に感謝しています。それまでは、中国の西南地域は大型の国際シンポジウムは開催できなかったんですね。まず、資金の問題。それから人脈の問題。ここはやっぱり内陸の方ですので、沿岸地域と違って日本とのつながりがどちらかというとちょっと薄い方ですね。だから日本の有名な研究者をお招きすることは難しいところがあって、でも国際交流基金の名を借りて、「国際交流基金の援助のもとでこういうシンポジウムを開催するんですよ」といって」メールを出してですね。もちろん王敏先生もいろいろ手伝ってくれました。ほとんどの先生に「喜んで参加しますよ」というOKの返事もらって、重慶に来て楽しい思い出を作って、またそれがきっかけで四川外大、それから西南地域の大学は日本の大学とのいろいろなつながりとか提携関係を結ぶことができるようになったわけですね。だから国際交流基金の援助のもとで国際シンポジウムができたことは大きな意味があったということ、私はここで申したいですね。それは本当の事実です。

俗な言い方ですが、そのシンポジウムに興味を寄せた日本の方は、「大物」が多かったです。日中文化交流協会の会長の辻井喬氏も重慶に来られたし、そして今でも日本で活躍されている法政大学教授だった川村湊先生、それから私の恩師の勝又浩先生、そして王敏先生も、お茶の水女子大学の犬塚常樹先生も重慶に来られたんですね。黄瀛先生についてのこんなに正式なシンポジウムができたのは初めてじゃな

いかと思います。中日文化交流史にこんな珍しい貴重な存在があったのかと、その意義を再認識しました。

私はシンポジウムの成果をまとめ、またそこから受けた示唆によって研究を深化するため、2010 年にも国際交流基金のフェローシップでまた法政大学に行って 1 年間研究し、黄瀛先生のすごく古い資料を集めたり、草野心平研究会の代表とも関係が作れたり、実り豊かな成果を挙げました。

この『詩人黄瀛』（王敏・楊偉主編『詩人黄瀛』、重慶出版社、2010 年）は王敏先生と一緒に編集したもので、黄瀛先生が 1930 年代に日本で出した詩集を、日本語と共に中国語の訳も付けて中国で出版しました。中国人はあまり黄瀛先生という貴重な存在を知らなかったの、紹介するという意味で訳文を付けました。資料もたくさん集めてあります。

また、例えば黄瀛先生と日本のモダニズム詩との関係とか、1930 年代の詩人との交友関係など、理論からいろいろ明らかにするために、『詩人黄瀛と日本現代主義詩歌研究』（楊偉主編『詩人黄瀛と日本現代主義詩歌研究』、西南師範大学出版社、2016 年）という本も出しました。こういう成果があって、また中国の国家社会科学基金プロジェクトにも申請して、採択されました。またさらに内容を深くして、原稿もできたんですけども、たぶん来年あたり北京大学出版社から出版される予定となっていますⁱⁱ。つまり、黄瀛先生のこういういろいろな研究は、私の学生時代から宿命的に決まったという感じです。でも、やっぱりある程度距離を置いて、弟子としてではなく学者として、黄瀛先生と日本人との交友関係とか、文学史における特別な存在としての意義をどういう風に再評価するかに主眼を置いて、まだまだ不十分な研究ですけども、頑張ってきました。

(3) 博士課程とその収穫/博士课程及其收获

私の人生も結構面白いですね。私は 15 歳の時に大学にもう入って、19 歳で大学を卒業して、22 歳で大学院卒業して修士ももらったんですね。だから先生になったのも結構若い時だったんですけども、私は天津師範大学で博士をもらったのは 50 歳を過ぎたところです。みんなが大学に入っていない時に私は大学に入ったんですけども、みんながドクターの学位をもらった時、私はまだもらっていないんです。なぜかという、日本だったら文学博士をもらうのは難しいじゃないですか。私はすごく黄瀛先生の影響を受けてですね、「それは一つの名誉ですよ、学位じゃなくて。」と言われたので、私は全然学位のことを気にしなかったんです。研究すればいいじゃないかなと思ってですね。でも後になって、やっぱり学位もらった方がいいんじゃないかなと言われるようになりました。天津師範大学に王曉平という先生がおられまして、普段、学会でもよく顔を合わせて、彼も重慶の近くの四川省出身ですので親しみを感じて話をする時に、「楊さん、私は何もできないですけど、学位をあげることはできますから、うちの所に来てください」と。そうして天津師範大学に入ると、そこは日本語学科じゃなくて、比較文学という専攻だったんですね。そこで良かったと思うのは、一途な日本研究の方法じゃなくて、中国と日本を比較する、そういう比較の研究方法がすごく大事だなと思直したことです。

昔は、日本研究はただ日本を研究対象として研究していたんですけども、でもそれは中国の問題意識とつながらないと、やっぱり中国人の興味をひかないから、ちょっと「周辺化」されてしまうんですね。もちろん、中国人の注目を集めるために勉強するだけでもいけないと思うんですけども、中国の研究者として中国人も興味を持てること、そういう視点をもって日本文学を研究すれば、もっと生産性があるんじゃないかなと思います。

そして比較文学の方法論を日本文学に取り入れれば、昔は見えなかったこともいっぱい見えてくるんですね。例えば、日本はここまで文学が進んでるんですけども、中国はどうなっているのか、そこを分からないと、東アジアという視点が持てないですね。だからやっぱり日本のこともわかって中国のこともわかって、さらに韓国のことにも目を向ければですね、東アジア全体のこともちょっと見えるんじゃないかなという、そういう広い視野が必要だということがつくづく分かったんですね。そこは天津師範大学で一番勉強になったことですね。

2. 日本の研究者との交流の思い出/回忆与日本的研究者的交流

日本のことを思い出すと、思い出はいっぱいあるんですね。いつも先生方にメールを送っていて、日本が恋しくなったなあという話をよくします。各段階でお世話になった先生もそれぞれ違うんですけども、でもみんな優しくしていただいて、本当に楽しい思い出もいっぱいできたし、私の人生にもいろいろな影響を与えてくださった先生が多いですね。

例えば法政大学の大学院時代、みんな勝又浩先生に年賀状出すんですけど、私が年賀状出したら、勝又先生からまた年賀状を返してもらったんですね。ゼミで会ったら勝又先生は、「ほかの学生には年賀状出さなかったんですけども、楊さんだけに返事した」と。私は外国人なので、たぶん特別にサービスとして優しくしてもらえたと思います。その時は日本人の思いやりを深く感じました。

私は中国に戻ってから、大江健三郎の『宙返り』の翻訳もしたんですけども、それは60万字のもので、だいたい丸一年をかけて翻訳しました。なぜそれをしたかという、法政大学に入った最初の授業で、堀江拓充先生に教わった小説が大江健三郎の『飼育』だったんです。私がこういう翻訳をするのは、もしかして堀江先生への恩返しかなと思って、そういう翻訳をしたんですね。

私はどっちかという、まずその先生に親しみを感じて、それからまた深い話ができる、そういうタイプですね。最初、距離感がある時は、あんまりお喋りができずにそっとしてるんですけど、勝又先生とはその時に（年賀状の件で）親しくなってから、しょっちゅう、今でも、私が何か翻訳する時に分からないところがあったら、メールで、「先生、先生は日本文学の大家ですから、教えてください」と（お伺いするんです）。今でもすぐお返事をしてくださるんですね。

私が2016年にまた国際交流基金のフェローシップで東大に研究に行った時、勝又先生が『私小説千年史』ⁱⁱⁱを出されて和辻哲郎賞を受賞した時だったんですね。それで、勝又先生にも会って、ぜひその本を中国人に紹介しようと思って翻訳も出したんです。それがきっかけで、翻訳が終わったら、私は日本の私小説にも興味を持ち始めて、今、そういう研究を始めているんです。つまり私は、日本人研究者とのお付き合いによって視野がどんどん広がって行って、自分の研究方向も多少違う方向にも発展していった、そういうケースもよくあるんですね。やっぱり日本の研究者のお付き合いのおかげだと思います。

（2016年に東大に研究に行く前、）2015年にJST（国立研究開発法人科学技術振興機構）で行われた、中国における日本研究のシンポジウムに招かれました。それは毛里和子先生と村田雄二郎先生のご紹介ですけども、でもさらに遡ると、実は国際交流基金の援助のもとでうちの大学で開催されたシンポジウムの時に、私は毛里先生と村田先生をお招きしたんです。そのシンポジウムの時にいろいろ学術的に交流して、お酒も飲んだりして、お互いの性格もわかったし、学術に対する熱意もお互いに感じて、お互い

に認め合ったんですね。それで JST のシンポジウムの時に、毛里先生と村田先生のご推薦で私は中国における日本研究のテーマにするシンポジウムに呼ばれたんですけども、そこからまたヒントをもらいました。毛里先生と村田先生は日本における中国研究者ですけども、我々は中国における日本研究者ですね。立場は微妙に違うんですけども、相手の国を見つめて研究するということは一致してるんですね。もしかして研究方法論的にはお互いに学びあうところがあるんじゃないかなと思って、「中国における日本研究と日本における中国研究との比較研究」というテーマを設定して、2016 年度のフェロシップに申請して、東大に行ったんです。そこで村田ゼミで勉強して、近代国民国家という視点から、中国の近代国民国家がどういう風に形成されているのか、そのプロセスの中で、言語、つまり言文一致とか中国の「白話文」はどういう風に形成されたかについて、日本の言文一致とも比較しているんですけども、それはいい視点だなと思って。だから研究成果として、村田先生の論文集（注：楊偉主編『語言・民族・国家・歴史——村田雄二郎中国研究文集』、重慶出版社、2020 年）を私と北京の何人かの方と一緒に——また日本の方もおられるんですけども——、出してるんですね。この本は中国でも評判になって、去年の末に『読書』という雑誌に、結構評価する文章も発表されてます^{iv}。だからやっぱりフェロシップで研究に行ったその甲斐があったなとつくづく思いました。

私がなぜこういう話をするかというと、日本の方々との学術交流の中でヒントをもらって、どんどん自分の研究が進展してきたからです。昔は結構、文学だけだったんですけども、文学の研究はやっぱり文化研究に広がっていきますよね。文学の視野ももっと広がっていくし、昔は文学だけでは見えなかったことも、いっぱい見えてきたと思います。だからそういう意味では、日本の学者との学術交流はすごく意味が大きかったと思います。

私は黄瀛先生を研究してきたじゃないですか。黄瀛先生のシンポジウムは 2 回開催しました。2008 年は「詩人黄瀛と多文化間アイデンティティ」、こういうテーマだったんですね。2016 年に 2 回目のシンポジウムが開催された時は「方法としての混血と越境」というテーマでした。だいたい 8 年を経過して、黄瀛先生をめぐるだいたいこの研究はどういう成果を挙げたのか、一つのまとめとしてそのシンポジウムを開催したんですけども、例えばディスカッションの時に、「私はこういう視点で見てるんですよ」、「いや、実はこれはまたヨーロッパの視点から見るとこうなんですよ」、「宮沢賢治とのつながりから見るとまたこうなんですよ」と、本当にいろいろヒントをもらいました。黄瀛先生という歴史上の人物については、結構、狭い内容かなと思ったんですけど、結局、学界で注目されるホットな話題につながりがあるということが分かりました。つまり一つの視点に限定しているとそんなに大した発展はなかったんですけども、いろいろな人と付き合っ、特に違う分野の人と接触することによって、これまで全然知らなかったことを知るようになるし、いろいろな研究方法もどんどんどんどん広がっていくということで、非常に意味が大きかったかなと思います。

また、もう一人お名前を言わなければならないのは早稲田大学の梅森直之先生ですけども、彼はアメリカと日本の思想史の研究をやっているんです。でも、彼の面白いことなんです、いつも素材として取り扱うのはいつも文学作品です。私は文学やってるんですけども、文学だけじゃ満足できないので、文学を切り口として思想に入っていくんですね。だから微妙に違うんですけども、一致しているところもあるので、梅森先生とのお付き合いを通して、なぜ文化研究がこんなに最近はやっているかということと、確かにそのとおりの意義があるということもわかりました。

学術交流を通して人的な関係もますます深くなったことも、たぶんヨーロッパの学者と違って、日本の学者との付き合いの特別なところですね。さっきの梅森先生とか村田先生も、今でもメールをよく交わしているし、日本に行ったら絶対、声をかけて、池袋かどこかでお酒を一緒に飲む、そういう関係になったので、そういうところは温かい学術交流になっていると深く感じるんですね。コロナが流行っている今ではですね、オンラインでもしょっちゅう顔合わせるんですけども、人間と人間のそういうお付き合いがどうしても必要ですね。そういうところは早くコロナは収束してほしいということですけども。

3. 西南地域の日本研究について/关于西南地区的日本研究

(1) 1980年代の西南地域の日本研究の状況/1980年代西南地区的日本研究状况

例えば、その時の四川外大の日本学部の主任の陳桂鈞先生もそうだったんですけども、四川外大の日本語の先生はほとんど昔、中国の東北地方、つまり古い時代に日本に占領された時代に日本語を勉強していたという先生が多かったですね。日本に留学する経験はなかったんじゃないかなと思います。ああいう先生は、昔はロシア語が専攻だったんですけども、日本と関係が良くなってロシアとの関係が悪化したので、ロシア語の仕事をちょっと中止して、また日本語を教えるようになったんです。だからそういう先生たちは自分も勉強しながら日本語を教える、そういう形だったんです。

今はインターネットの発達によって、重慶で得た情報と、北京とか上海で得た情報はそんなに変わらなくなりましたけども、1980年代は情報量の差が大きかったです。だから、先生は一生懸命に勉強して研究もしてるんですけども、やっぱり西南地域の日本の研究レベルはほかの地域よりだいぶ遅れていたと思います。

(2) 近年の動向/近年来的动向

昔は沿岸地域と東北地方の日本研究のレベルは高く、今でも非常に高いです。でも昔と比べると、西南地域との差が昔ほど激しくなくなったと思われます。(昔は)、例えば資料の関係とか、日本に行くチャンスとか、沿岸地域の方が圧倒的に多いですね、日本人との交流でも。そういう意味では研究の基盤の差が大きかったので、なかなか比べ物にならなかったですね。だからそういう意味では、国際交流基金が我々の研究所(注:四川外国語大学日本学研究所)を長く支援してくれたのは、たぶん中国のアンバランスを少なくしようというところにも狙いがあると思います。お世辞じゃないんですけども、国際交流基金は長い目でですね、中国における日本研究の力を育成しているということを私は本当に実感しています。

また昔は、四川外大(の日本研究の中心)は日本語学科ということで、言語研究がほとんどだったんですね。「は」と「が」の区別とか、ああいう文法的なことですね。最近はちょっと変わって、文法の問題が、言語の使用とか発想の違いとか、文化にも絡んでくることが分かりました。だから今、うちの大学でもそういう研究分野にチャレンジしているんですね。例えば私は近現代の文学ですけど、古典文学では例えば陳可冉先生と趙曉燕先生など、平安時代の文学とか近世の文学とかをやっている人が増えてるんですね。それ以外に、日本学研究所副所長の王宗瑜、彼も国際交流基金のフェローで日本に行ったこと

があるんですけども、彼は国際政治という視点で日本研究をしているんですね。例えば清末の日本人は、どういう風に中国人を見ていたのか、あるいは新中国成立後に中日友好を（推進した）村田省蔵をはじめとする人物は、どういう行動をとったのか、そういうテーマに取り掛かっているんですね。

また、西南地域と日本の関係に注目する人が多いですね。つまり自分の地域の特色を生かして、日本人は昔、重慶、四川省、貴州省、雲南省に来て何を見たのか、それを見てどういうコメントをしたのか。遊記を書いたと思いますけども、いろいろ学術的な書も出しているんですね。だから私が知っている限りでは、貴州大学の王曉梅先生は、日本人の西南少数民族の研究をめぐる研究をしているんですね。日本人は興味を持って貴州の少数民族をいろいろ見たり、本を出したりしてるんですけども、それをまず中国に紹介するんです。またそれをベースにして、日本人の西南少数民族の研究に対する研究もやっているんですね。それは中国でも高く評価されて、国家社会科学プロジェクトにも採択されていると思います。

これは地域の特色を生かした研究ですけれども、さっきも申しましたように、情報もどこでも簡単に得られるようになったし、日本に行くチャンスも増えていますので、地域をベースにしながらも、中国全体にも目が行くようになった研究も増えていると思います。だから、まだまだ沿岸地域と差があるんですけども、みんな努力してその差を少なくしようとしているところが、誰にでも分かると思います。特に——もう一つ原因があると思うんですけども——、最近、日本で留学して博士をもらって中国に戻る学生が多いんですけども、沿岸地域の大学のポストがほとんどいっぱいになって、入れないようになってるんですね。だからその人たちは西南地域にも来るようになったし、研究の新しい力になっている、そこも今のこういう研究の新しい展開につながっていると思います。

四川外大の日本学研究所は、ちょっと遅いですが、2006年に成立しました。我々はちゃんとわかってるんですけども、大きなプロジェクトですと沿岸地域にはかきませんから、まず自分の一番得意の分野から着手しようと思って、最初に取り掛かったプロジェクトは黄瀛先生の研究テーマだったんですね。そこからだんだん大きなテーマに広がっているポリシーをとりました。

話をすればきりがありませんけれども、付け加えさせていただきたいのは、うちの研究所から研究叢書も出しているんですけども、それはほとんど国際交流基金の支援で開催されたシンポジウムの成果です。成果の出版資金も国際交流基金から一部支持してもらったことを、ここで言うっておかなければならないと思います。特に私が言いたいのは、プロジェクト申請の時に国際交流基金は絶対に、あれをしろとかこれをしろとかは言わないですね。つまり割合に自由な立場で、自分の好きなテーマを選んで、いろいろプロジェクトを申請するんです。別に、制限付きで支援を受けているわけじゃない、そういうこともありがたいと思います。これからも同じ立場で支援していただければいいなと思います。

もう一つ、私は西南地域を代表して言いたいんですけども、確かに沿岸地域との差が少なくなっているんですけども、でもやっぱり、国費留学の機会は上海とか北京の方が圧倒的に多いです。だから、もしそういう日本留学や研究のチャンスは、こういう恵まれない西南地域の方にちょっと気を使っただけで、もっと中国の日本研究のレベルの差は減少していくと思います。よろしくお願いします。

4. 今後に向けて/关于今后的日本研究

中国は、昔は、日本をただ西洋を見る窓口、ツールとして見てきたんですね。ヨーロッパを擬製したも

のを日本から学ぼうという、そういう立場が多かったんですけども、最近、日本の文化も独特なものだという意識がだんだん強まっていると思います。特に最近私も思うんですけども、孫歌先生の話の借りますと、日本を一つの「方法として」、つまり一つの思想資源として見たほうがいいんじゃないかなと思います。そういう立場に立って研究を進めると、またいろいろと新しい発見があると思います。

我々は日本を研究していますから、やっぱり日本研究は私たちの生き方にも関わっているんですね。

我々は日本研究を通して世界を見ている、中国を見ている、さらに自分を見ている。誰でも一つのメディア、媒体を通じて世界を見ているんです。冷静に、イデオロギーに影響されずに、束縛されずにニュートラルな立場で見るのも確かに大切ですけども、さらに進化すると、やっぱり中国の問題意識と関連して日本を見ていく、つまり日本を通じて中国を見る、自分を見る。日本という、もう一つの目を我々に与えるということですね。だからそういう意識をもって研究すれば、もっと面白くなるし、いろいろ新しい面白い発見があるんじゃないかなと思います。そして周辺化された日本研究もいつか中国の中心になっていく、そういう日も来るんじゃないかなと思います。

公開：2023年5月11日

i 楊偉『日本文化論』重慶出版社、2008年

ii 杨伟《越境・身分・文学——‘铜锣’及其主要同人研究》北京大学，2023年（予定）

iii 勝又浩『私小説千年史』勉誠出版、2015年

iv 卢华《“文”的世界与现代东亚的历史》，《读书》2021年第12期，生活·读书·新知三联书店

複製・編集を禁じます

禁止复制编辑文稿内容